

令和元年12月5日発行(毎月5日1回発行)
第59巻12月号(通巻725号)

風土



霜月や漏るる馬穴に真綿つめ

(句集『高蘆』より昭和四十六年作)

「霜月」は陰暦十一月で、陽暦の十二月前後にあたります。桂郎師は相変わらず、七畳小屋で執筆活動をしていきますが、心筋梗塞がやっと回復したばかりです。医者に重いものを持つなど言われ、噴井までの水汲みもままなりません。結局は編集を手伝っている手塚美佐氏の手をわずらわすこととなります。バケツにできた穴に真綿を詰めると水漏れが防げることを教え、空のバケツを手塚氏に渡すのです。

ひとの手を借り得ぬもの海鼠買ふ

(句集『高蘆』より昭和四十六年作)

桂郎師の食通は有名です。海鼠を食べたくなったのでしょうか。ここで「ひとの手を借り得ぬもの」がわかりにくいと思います。普段の食材は奥さんに頼んで買ってもらうのですが、「海鼠」については自分で吟味しないと気が済まないのです。魚屋で丸々と太った赤海鼠を手に入れ、嬉々とした桂郎師の顔が見えます。

枯山へ餅搗く音のゑくぼなす

(句集『貴椿』より平成十二年作)

器師は「命ふたつ」を信条に俳句を作り続けました。「命ふたつ」は端的に言えば対象の命と交感することで、対象の命を輝かすことです。ここでは「餅搗く音」を「枯山」がどう受け止めるかを、「ゑくぼなす」と聴覚から視覚に転換させて、「枯山」がその音にどのように反応しているかを映像かしているのです。搗くたびに凹む餅とその音で枯山が凹むかのように読み手に想像させるのです。「枯山の命」を輝かす世界になっています。

桂郎の余生をもらふ牡蠣雑炊

(句集『貴椿』より平成十一年作)

桂郎師は昭和五十年に六十六歳で亡くなっています。器師はこの年、すでに七十歳を越えています。「桂郎の余生をもらふ」はそのことですが、「もらふ」に桂郎師の短かった俳句人生を偲ぶ心がみられます。また「牡蠣雑炊」は桂郎師が亡くなった時の器師の句「死におくれ牡蠣のうまさをかなしめり」を踏まえたものです。桂郎師への想いの深さが伝わります。

なんでんかんでん

南 うみを

丹後・世屋の里 七句

秋風の世屋に藤織り講習会

藤布を「のの」と伝えて葛の花

つゆ草をめつた打ちして山の雨

棚田から日本海へ堰外す

田の神にひと株のこし稲を刈る

稲 架 け て 棚 田 い よ い よ 砦 め く
ま つ す ぐ に ふ る へ る 糶 刈 り に け り
秋 蝶 に 荒 瀬 の し ぶ き は だ か れ る
も み 殻 を 押 し 上 げ て ゐ る 貝 割 菜
菜 を 間 引 く 指 ち ま ち ま と し て き た る
丹 田 を 一 気 に 落 と し 南 瓜 切 る
野 分 来 と な ん で ん か ん で ん 括 り を り



竹間集

同人作品



月上がる

田中佐知子

青々と帰省子を待つ豊かな
ひたぶるに欲す詩の才青林檎
原爆忌挽ぎしトマトの熱きかな
野分過ぎ藍にはかなる日本海
クリムト展出て金箔の月上がる
密にしてさみしきむらさき式部の実
病窓より見えぬて遠き曼珠沙華

獺 祭 忌

中村 洋子

子規子規庵特別展 五句の間に坐りて仰ぐ糸瓜棚
子規の描く「朝顔」九月十二日
「泣キナガラ書ク」俳句なり獺祭忌
横になり子規の目線の鶏頭花
「食ヒナガラ泣ク」のみの子規忌かな
秋の海へ急がぬ雲と急ぐ雲
けふの空深くなりたる雁渡し

糸 霰

橋添やよひ

新涼や藍染め上がる糸霰
いなづまや湖北の奥の宮照らす
子規の貌といひしむかごを捜しをり
頷いてばかりの人や秋扇
身軽さの太鼓六斎踊り出づ
国交の穏やかならず鴟高音
法師蟬もとのひとりとなりて聴く

今日の月

浅田光代

萩咲いて今日は遷座の一仏
秋灯や写真のなかの知らぬ母
墓なのか石ころなのか秋夕焼
稲の花古墳の風のやはらかき
鬼胡桃いま縄文のパワー欲し
まあちやんが死んでしまつて今日の月
いつもの窓にいつもの媪落とし水

月の秋

柿沼 盟子

高層のビルの間も月の秋
流れ星あまたのみこみ海冥し
挟みたる急ぎの仕事居待月
人波を先に行かせて草ひばり
ぽつかりと生産緑地鷓高音
新米と特筆大書のとき来る
台風来宿の枕のたよりなく

彼岸花

高村 令子

名月や埴輪は眠る瞳を持たず
肩叩くだけの挨拶良夜かな
驕り無く人と競べず草の花
無人駅また無人駅彼岸花
軸足の決まらぬ齡更衣
葛の花手繰る記憶の絡まりて
あの世とは月の裏かもきつとさう

合歓咲いて

土井 三乙

合歓咲いてグループホームは坂の上
閉められて西日に染まる硝子窓
全身が珈琲を欲る昼寢覚
影重く沼の上飛ぶ夏の蝶
ポイントを移る釣人溪涼し
池までの間を四五歩に夏座敷
水の飲んで羽搏をして羽抜鶏

秋の

土井
三乙

盆の来てまた遠くなる父母のくに
小指ほどこそ良かりけり秋なすび
失念のこの頃ふえて鳳仙花
かなかなに窓開けられて会議室
熱を持つ携帯電話秋暑し
植込の雀野分に低く散る
家裏に組まれて小さき葡萄棚
手に馴染む不思議よ木瓜の実の歪

通るたび何か言いさう石榴の実
そよ風を連れて九月の書肆に入る
虫鳴いて英会話塾午閑か
貌思ひ出す蟋蟀の声聞けば
主の背高き九月の青果店
紅玉とふ津軽の林檎妻に買ふ
窓辺の椅子とテーブルのマスカット
空中停止ついと解きたるやんまの眼
屍はつねに動かざるもの秋茜
十月の山燃え立たす没り日かな
長き夜のはじめに開く電子本
星いつも斜めに飛んで北の国

山河集

同人作品



南うみを選

雲間より日の差すやうに小鳥来る
柿にまだ柿の色なく子規忌かな
雁渡し川かがやきて海に入る
オクターブ上がる虫の音夜の更けり
衣被酔ひはしづかに来るものよ

石井 秀二

颯風裡時計廻りに茶挽白
夜颯風チャンネル替へて追ひ回す
さざ波の音して秋の貝風鈴
てらてらと波に融けゆく秋入日
チューブより搾りきると秋の蝉
また一人迷子秋祭は佳境
石段に白く光れり祭足袋
山門の幕の白さや大施餓鬼

岡本 尚子

瀬戸 薫

秋の昼手持ちぶさたの献血車
鉄橋の真一文字や稲穂波
酌みかはす仏ばかりの月の客
すめらぎも湯浴みし道後瀬祭忌
台風の洗礼いくつ列島浴ぶ
蓮の実のとんでうたかた人逝かす
台風過狭庭に倒る月桂樹
実石榴の口尖らせてたわわなる
産土の大樹を基地に稲雀
こつんと手に当たるとんぼう野良の道
投げ入れのやうな一群彼岸花
両腕を抱く月光の冷たさに

川田 好子

高橋まき子

風土独語／南 うみを



雲間より日の差すやうに小鳥来る

石井 秀一

比喩は、二つのイメージを重ねることで表現世界を重層化します。この場合、単なる小鳥ではなく、きらめきを纏った小鳥をイメージさせ、暗から明への転換した世界を読み手に与えます。

ふんばつて乳呑む子牛秋うらら

谷田明日香

この句は「ふんばつて」と言う言葉が、子牛の力強い生命力を読み手に伝えています。生れ落ちてしばらくすると起ち上がりさっそく母牛の乳を突き上げて呑みます。「秋うらら」も佳いです。

チューブより搾りきるごと秋の蝉

岡本 尚子

これも「秋の蝉」の鳴き声を「チューブより搾りきる」中味に喩えました。数が少なくなりその鳴き声もぼつりぼつりと消えていくように、チューブの中身も無くなつて、空になる様子を重ねたのです。聴覚を視覚に転換した比喩と言えます。

山小屋の一期一会の夜長かな

眞弓 真鈴

「山小屋」も季語ですが、ここでは秋のモノとしての言葉で、季語は「夜長」になります。山小屋での出会いは、恐らく一回きりです。その後の山行の厳しさを想うと、「一期一会」が身に染みるのです。心打ちとけて夜の更けるのも忘れて語り合うのです。

また一人迷子秋祭は佳境

瀬戸 薫

この句は、私たちが何かに夢中になつている時に、その周りから大事なものが零れ落ちてしまふという現実を、「秋祭」の世界で伝えています。「また一人迷子」に作者の醒めた眼を感じます。

酌みかはす仏ばかりの月の客

川田 好子

「仏ばかりの月の客」から、作者はしみじみと年輪を噛みしめています。月を仰ぎながら浮かぶのは鬼籍に入った友の顔です。その顔に囲まれながら良き時代のことを語り合うのです。

干されある磯着小さき雁渡し

赤石 梨花

「雁渡し」は初秋から中秋にかけて吹く北風で、雁の渡る頃です。もとは志摩や伊豆の漁師の方言からの呼び名です。この句は「磯着」から志摩の海女漁を想像させます。秋になり、海女漁も終わりかもしれません。懐かしき景色が醸し出されています。

投げ入れのやうな一群彼岸花

高橋まき子

この句は「一群」の彼岸花を「投げ入れ」と捉えました。茎をぬつと出し、花を浮かべる「彼岸花」の有り様が掴まえられています。
<以下略>

風土集



南うみを選

ふんばつて乳呑む子牛秋うらら

舞鶴

谷田明日香

雨の日は雨のほひや草の花

乾涸びの葉にしてゴーヤ太りゆく

鳴く鹿と独りの夜を分かち合ひ

故郷の木の実を庭に埋めにけり

山小屋の一期一会の夜長かな

立川

眞弓 真翁

独り酌む酒の空しき良夜かな

被災地の情報遅し台風過

老犬を連れて媼の秋の暮

頼まれしことの疎まし秋の風

海のほか染めるものなし秋夕焼

阿南

島 玲子

湖に月の道あり竹生島

落鮎の竹串青く焼かれけり

新米を送る荷札の楷書かな

石積みの屋敷神にも新走り

どことなく挨拶親し台風過

逗子

高橋まき子

橋に佇つ秋の日傘に水かげろふ

昼の虫一人の食事すぐ終はる

開け放つ広縁に風竹の春

フオワードは一番汚れ天高し

丹沢の稜線しるき帰燕かな

横浜

赤石 梨花

夕野分去りし木の息草の息

干されある磯着小さき雁渡し

厄日くる濡葉片敷く石畳

台風之余波の濁りに浦明くる

月の道我をまつすぐ清めけり

焼津

川井さち子

霧の中湯船は空とつながりし

木の実降る日舞はムーンウォークかな

秋更くるコントラバスの茜色

羊雲もたれかかりて富士の山